

奨励賞

【自由作品】

麦 秋

太田 要介

小学校の教師をしていた三十代の初め、担当する学級の経営が思うようにいかず、私は鬱屈した日々を過ごしていた。

職場では平静を装っていたが、夕方家に帰るとすぐに酒を飲み、少しでもその鬱屈を晴らそうとしていた。初めてビールを飲み、次は日本酒の熱燗である。酔いが回つてくるにつれてその日あつた嫌なことが徐々に消え、代わって偽りの快感に支配されていく。私は一種の酩酊状態に陥つてた。

でも、どれだけ酒でごまかしても、状況から逃げているだけであるという事実は変わりようもなく、酔いが醒めると私は再びあの鬱屈と向き合わねばならなかつた。

そんな三月のある日のこと、私はふらりと近くの山に出かけてみた。まだあちこちに残雪が見られ、山の斜面は雪解の雫に満

ちていた。ふと見ると地面近くに白いものがある。明らかに雪とは異なる白いもの。私はさらに近づいてみた。よく見ると、長短の花弁が放射状に伸びていて、川釣りで使う毛鉤をぎゅっと縮めたような純白の花だった。

一体何の花だろうか。皆目見当がつかなかつたけれど、私はしばらくを忘れて花に見入つていた。そしてこんなにも心躍らせるその花の名前を是非とも知りたいと思つた。私は、そつと花の一本を根元から摘み取り、山野草に詳しい町内の知人に訊いてみることにした。

夕方その年輩の知人宅を訪れると、玄関で花を見るなり「オウレンや」と教えてくれた。私はその名前を聞いてもう一度驚いた。母親が時々飲ませてくれたあの苦い薬草の黄連と、目の前の可憐な白い花とがぐには結び付かなかつたからだ。

その時からである。こんなに身近なところにこんなに綺麗な花があるのならと鼓舞されて、私は町内の野山に咲く花を自分の眼で直接見てみたいと思つた。ただ見るだけではなくその証として、一つひとつを八ミニフィルムに収めることにした。野の草花

は、色も形もそれこそ千差万別で、その名前もキツネノボタン、ミヤコワスレ、オカトラノオなど好奇心をそそるものが多く、休日に里山を一人歩くことが私の癒やしの時間になつていった。

それが効を奏したのか、教師として抱え込んでいた鬱屈も心なしか少しずつ和らいでいくように感じられた。何か劇的な変化があつた訳でもないが、学級の子供達と向き合うことが以前ほどには苦にならなくなつていつた。

そして時期を同じくして、それをさら後に押しするような事が私に重なつた。町内の人から、公民館の活動に参加しないかと声が掛かつたのである。

今思えば、それは私にとって一つの転機であつた。広報部担当として館報や文集を発行するかたわら、クロス職人や電気技師、自動車整備工などのそれこそ様々な職種のしかも同世代の人達との集まりで、呑み、語り、活動と共にしていくことは私にどうてとても新鮮であつた。何よりも嬉しかつたのは、自分が他から受容されていることじができることができたことであつた。

世の中つて一体何だろうか。自分で働い

て食べていけることが世の中への第一歩だとするならば、教師としてストレスや悩みを抱えながらも子供達を教えていた私は、少なくとも世の中の端っこぐらいには立つていたと思う。ところが公民館組織という異質の集団に仲間入りした時、私はさらに一步進んで、世の中という渦のようなダイナミズムの一端に触れたような気がした。後年の四十代だつたと思う。能登出身の作家加能作次郎の作品を読んでいて次の一節に出会つた。「人は誰でもその生涯の中に一度位自分で自分を幸福に思う時期を持つものである。」と。私はつい、心の中で大きく頷いたのを覚えている。

野の草花と公民館活動からエネルギーを貰い、子供達や職場の人々に支えられて何とか続けられた教職を定年で退いてから、早や十四年が経過する。

三十代の初めにオウレンの純白に魅了された私は、ここ十年余りは、麦秋の中を歩くことが楽しみになつてゐる。五月の終わりから六月の初めにかけて麦の穂が一面琥珀色を帯びて熟する光景は、何ともいえないう味に溢れており、そんな麦秋が私は好きだ。特に、落日に照らされた時などは祈

りじ寂寞を伴い、その中ではまるで自分が
濾過されていくような気持ちになる。と同時に、柔らかいうねりを繰り返す穂波とそ
れを支える茎と葉の、今にも枯れなむとする
色の集合を眺めていると、この身もまた
のように枯れ行くことができたらなあと、
とんでもないことを思つたりもする。
麦秋を思うとなぜか、村々を廻る物売り
の声が遠く聞こえてくる。